

社会科

岩山 直樹 眞田 裕人

1 社会科における学び続ける子供とは

社会科における学び続ける子供とは、社会的事象の見方・考え方を働かせながら、社会的事象に対して見いだした問題を解決するために、進んで社会的事象に関わり、社会認識を深めていく中で、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする子供である。

(1) 「社会的事象に対して見いだした問題を解決するために、進んで社会的事象に関わる」とは

子供は社会的事象に出会うと、自分の生活経験や既習事項を基にして、社会的事象に関わり始める。そこでは、子供はその子らしい社会的事象の見方・考え方から、疑問をもったり予想したりすることを通して、問題意識を高め、解決の見通しをもって社会的事象に関わりを求めていく。そして、問題解決に必要な情報を求めながら具体的な知識を獲得していくことで、根拠を伴った自分の考えを明確につくり上げていく。

第3学年「みそ工場で働く人と仕事～Nさんのみそ作り～」では、みそ作り体験を振り返るところから学習が始まった。子供は、仕事の工程や生産者の工夫に着目して疑問や予想を話し合うことを通して、問題意識を高め、学習問題「138年間続くみそ屋のNさんは、どのようにして1日3tものみそを作っているのだろうか」をつくった。そして、学習計画を基に工場を見学したり、生産に関わる必要な情報について調べたりして問題解決に必要な情報を集め、具体的な知識を獲得していった。そうすることで、子供は、根拠を伴ったその子らしい考えをつくり上げた。これが「社会的事象に対して見いだした問題を解決するために、進んで社会的事象に関わる」姿である。

(2) 「社会認識を深めていく」とは

子供は問題を解決する過程で、それまでの社会的事象への理解と新しい事実とズレを感じたり、社会的事象の特色や相互の関連、意味に対する友達と自分の考えとのズレに気付いたりする。ここでは、粘り強く社会的事象や友達と関わり、吟味する過程で自分が納得する考えをつくり上げていく。その中で、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に捉え、概念等に関わる知識^{*1}を獲得していく。

先の事例における学習問題について話し合う中で、子供は、Nさんが抱える悩み（みそ離れでみそが売れず、店を閉じるみそ屋が増えており、今では市内で2件しか工場が残っていない）と出会った。この事実を知った子供は、Nさんが消費者のみそ離れが進む中でもみそ工場を続けることができる理由について問題意識を高め、「Nさんがみそ屋を続けられる秘訣は？」という新たな学習問題をつくった。そして、この問題に対して多くのつぶやきが広がることで、子供は多様な考えがあることに気付き、自分の考えを整理し、友達と話し合うことにした。

話し合いの場では、子供は、これまで獲得した知識を基に自信をもって、自分なりの考えを伝えた。その中で、子供は「新しい商品を開発する」というH児の考えに出会った。この考えは、伝統の味を守ることが大切だと考える子供にとって、関わりを求めたくなるものである。H児の考えにズレを感じた子供は、ズレの要因を探ろうと質問して関わりを求めた。そして、H児の考えの背景を知る中で、同様の考えをもつS児らも「みそじゃないものを売ることも大切だ」と付け加え始めた。すると、A児がホームページの情報を根拠に多様な商品が販売されている事実を全体に広げ始めた。Nさんがみそ以外のものを販売している事実と納得した多くの子供は、商品開発の視点から、みそ以外のものを販売することについて考えるよさを見いだした。そして、商品開発の視点から問題意識を高め、「本当に商品を増やすことがみそ屋を続けるための秘訣なの？」という問いをつくり上げた。

子供はこの問いを解決すべく、解決のための視点となる「お客さんの声」に着目することで、「お客さんの声を聞いて伝統のみそや新商品を作ると、今までのファンだけでなく新しいファンが増える」という仮説をつくった。そして、この仮説を検証するため再びNさんに話を聞き、工場の仕事の様子を、地域における消費者の願いと関連付けて捉え、考えを再構築した。これが「社会認識を深めていく」姿である。

(3) 「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする」とは

社会生活についての総合的な理解を積み重ねた子供は、自分たちと社会との関わりに気付き、社会に見られる課題を身近な自分の問題として考えていく。また、これまでの学習での学び方や理解した内容を、次の学習に生かしていく。そこでは、これまで獲得した概念や複数の価値^{*2}を基に、

自分たちに協力できることや、よりよい社会の在り方を考え続けたり、自ら働きかけたりする*3。
お客さんの声が、Nさんの力の源となり、伝統の味を守りつつ商品開発をしてみそ屋を続けていくことにつながると理解した子供は、みそ離れが広がる現状に再び問題意識を高めた。そして、Nさんのみそ屋がこれからもずっと続いていくためにNさんが取り組むべきことを考え始め、考えたことをNさんに提案したり家族に伝えたりした。これが「よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする」姿である。

2 学び続ける子供を育てるには

(1) 子供が必要感をもって学習対象と関わるために

① 社会的事象との出会いの場や課題設定の場を工夫する

- ・子供が社会的事象に着目し、知的好奇心を喚起するよう、子供が生活の中で直面する切実な問題（知りたいこと）、生活経験や既習事項で説明ができない事実、心情に訴える事実と出会う場を設けたり、体験的な活動の場を設けたりする。その際、社会に見られる課題を解決していく探究となるよう教科横断的な学習過程を構想する。
- ・その子らしい着眼点で問題意識を高め、問題を解決する過程で友達に自分の考えを伝えたいくなるよう、友達と共に学習問題をつくり、学習問題に対して予想したり、解決の見通しをもったりする（達成可能な程度の高い学習計画を立てる）ことができる課題設定の場を設ける。

② 社会的事象と十分に関わることでできる場を工夫する

- ・多面的・多角的に事実を捉えることができるよう、ICT環境を整え、資料やインターネットを使っての調べ学習や、見学やインタビューといった学習等、情報収集するための多様な活動の場を設ける。その際、実感を伴って理解し、知識を獲得することができるよう、本物に触れる場*4を設け、当事者の立場で目的を考えていく単元構想をする。
- ・つくり上げた自分の考えに自信をもつことができるよう、情報を整理・分析するための場を設けたり、問題を解決する過程や学習計画に対する達成度、その子らしい着眼点に対して、朱書きや賞賛の声かけを行ったりしていく。

(2) 子供が自ら問いをつくるために【重点】

① 新しい事実と出会う中で問題意識を高め、その子らしい着眼点で考えをつくる場を工夫する

- ・子供が概念等に関わる知識を獲得していくためには、社会的事象と十分に関わる中で、問題解決に関わる事実と出会い、問題意識を高めることが必要である。そこで、資料提示や発問等で新しい事実との出会いの場を工夫し、学級で考えるべき学習問題として焦点化する。
- ・子供が自分の考えをつかって友達と話し合う必要感をもつことができるよう、事実に対する考えの根拠や価値観の違いが見えてくる様相を見とり、その違いを発問等で学級全体に見えるようにする。その際、単元や実態に応じて、自分が大切だと思う根拠や価値観（既習事項や生活経験）を見つめ直して考えをつくり上げる時間を保障する。

② 自分の考えとズレを感じる友達の考えと出会う場を工夫する

- ・誰がどのような根拠や価値観をもって考えをつくり、どのような考えとどのような状況で出会うことでズレが生じるのかを想定して授業を行う。その際、立場や根拠といった互いの考えの背景を板書やテレビで見えるようにする。

③ 自分の考えと友達の考えとの異同を明確にし、学級全体で問いを共有する

- ・子供が何に納得し、何に対してズレを感じているのか、ズレの要因を学級全体で十分に探ることができるようにする。その際、ズレの要因となった表現から考えるよさを見いだせるよう比較検討の場を設ける。そして、考えを吟味する中で、子供が問いを明確にした姿を見とって、学級全体で考えるべき問いとして共有し、板書等に位置付ける。

(3) 子供が自ら問いを解決するために

○ 子供が解決のための視点を求める場面を想定し、話し合いの場を構想する

- ・問いをつかった子供は、既習事項を関連付けて類推する中で、問いの解決へと向かう。そこで、子供が、自分や友達の既習事項の中にある「解決のための視点」に気づき、その視点から仮説（解決策や新たな価値）をつくり出すことができるようにする。その際、解決のための視点をもつ子供の考えを全体に広め、その視点から考えるよさについて互いに納得できるような話し合いの場をつくる。そうすることで、子供は、自分の考えに足りない部分は補い合い、自信のある部分はより確かなものにして、仮説をつくる。そして、仮説を検証するために再び社会的事象に関わりを求め、考えを再構築していく。

*1 価値的知識を含む。*2 発達段階や単元によっては社会参画に関わる場面が設定されない場合もある。*3 歴史学習では、獲得した概念等を、現代社会の中で汎用的に使うことである。*4 状況によっては、オンライン・リモートでの関わりも含む。